

静岡県公立高等学校芸術科の振興を図る実践的研究：  
芸術科の専門性を活かしたキャリア教育プログラムの  
開発

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水田, 忍美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009548">https://doi.org/10.14945/00009548</a>

# 静岡県公立高等学校芸術科の振興を図る実践的研究

—芸術科の専門性を活かしたキャリア教育プログラムの開発—

水田 忍美

The Development of a High School Art Course in Shizuoka Prefecture:

A Career Education Program Based on a Specialization in Art

Shinomi MIZUTA

## 1 はじめに

社会や経済の構造、雇用環境等が急速に変化する時代の中であって、将来子どもたちが就く職業の在り方も、現在とは大きく様変わりする可能性がある。こうした新たな時代における教育の在り方について、教育基本法の第2条（2006.12.22改正）では、知・徳・体の調和が謳われ、第2期教育振興基本計画（2013.6.14）では、生きる力の育成や、豊かな心の育成に加え、社会的・職業的自立に向けた力の育成のための体系的・系統的なキャリア教育の充実が示されている。また文部科学省は、「オリンピック・パラリンピックレガシー創出<sup>1)</sup>」を掲げ、文化芸術分野には、包容力のある社会の実現や魅力あふれる社会の創出、成長戦略の牽引等の新たな期待が持たれている。

静岡県は、静岡県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン 第2期計画」（2014.3）において、「生涯学習」と「文・武・芸の三道の鼎立（ていりつ）」を推進し、知・徳・体の力を万遍なく伸ばすことを目指している。また静岡県産業教育審議会答申「専門高校等における新しい実学の奨励の在り方について」（2015.8）では、芸術科<sup>2)</sup>に、専門的職業の実際や新たな産業の現場体験、芸術に関連する企業やアートNPOとの連携等が示された。

このことから、高等学校（以下、高校と記述）段階における生きる力と豊かな心の育成は、生涯学習における知と徳の力の向上につながり、その向上のためには、芸術の特性を活かした高校における教育活動の充実を図る方策を探ることが重要と言える。すなわち、専門教育を行なう芸術科の充実を図る方策が必要となる。

## 2 研究の目的と課題

そこで本研究の目的を、芸術科の専門教育の振興を図る方策の開発とする。社会的・職業的自立に向けた力の育成のための体系的・系統的なキャリア教育を軸とし、この目的を達成するために、①国および静岡県における高校教育政策と文化政策の動向を明らかにした上での芸術科の特徴の整理、②静岡県公立高校芸術科生徒のキャリア意識の把握、③芸術科卒業生のキャリア形成の特徴と要因の解明、④高校生の文化芸術的活動に関する意識の把握と活動の開発、⑤専門教育と一体となった芸術科におけるキャリア教育プログラムの開発の5点を課題として設定した(図1)。

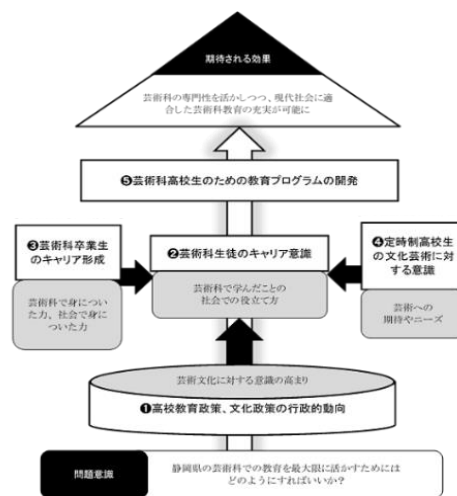


図1 本研究の概略図

### 3 調査の結果

#### (1) 国および静岡県における芸術科設置状況

全国における芸術科設置高校の状況を、全国音楽高等学校協議会<sup>3</sup>、全国美術高等学校協議会<sup>4</sup>、全国書道高等学校協議会<sup>5</sup>に加盟する学校数から考察した。音楽科は、全国的には私立で多く設置されている。東京都の10校（公立1校、私立9校）、次いで埼玉県の6校（公立4校、私立2校）、静岡県はこの2都県に次ぐ5校（公立3校、私立2校）である。静岡県は全国的に見て、音楽科が多い。また美術科は音楽科とは異なり、全国的には公立高校での設置が多い。最も加盟校数が多いのは、静岡県の5校（公立2校、私立3校）と熊本県の5校（公立4校、私立1校）、次いで京都府の3校（公立2校、私立1校）と福岡県の3校（公立2校、私立1校）である。書道科は、美術科と同様、公立高校での設置が多い。最も加盟校数が多いのは、静岡県の3校（公立1校、私立2校）、次いで埼玉県と熊本県、福岡県の各2校である。全国的に見て、静岡県の美術科と書道科の加盟校数は最も多い。上記協議会の加盟校数の比較から、これまで静岡県では、芸術科教育に力が入れられてきたと言える。

しかし、平成27年度には静岡県での音楽、書道での高校教員の募集がなく、静岡県公立高校において、本務教員が無配置の高校は増加傾向にある。このことから、高校における芸術教育は厳しい現実と直面していると言える。

#### (2) 静岡県公立高等学校芸術科生徒のキャリア意識の把握（調査Ⅰ）

芸術科高校生のキャリア意識を明らかにすることを目的に、芸術科高校生へキャリア意識に関する質問紙調査を実施した。調査結果を因子分析、テキストマイニング<sup>6</sup>等を活用した量的・質的分析を施し、その分析結果から考察を行なった。

静岡県全公立高校芸術科の調査は、2015年5月下旬に行なった。回答した生徒は296人であり、回答はすべて有効回答であった。回答の数量的分析にはExcel 2013、因子分析等はSPSS17.0、自由記述の質的分析には、NTTデータ数理システム社のText Mining Studioを使用した。

調査結果の量的分析からは、音楽専攻の生徒が他専攻生徒との比較において、早い時期に芸術分野での将来を意識していることがわかった。次いで因子分析を行ない、現在の芸術科生徒のキャリア意識では、「職業の理解」、「将来の不安」、「現在の不安」、「周囲への困惑」の4因子が明らかとなった。続く4因子の多重比較からは、3年生は2年生に比べて「職業の理解」が進み、2年生は3年生に比べて「将来への不安」が大きいことが明らかとなった。専攻別の因子得点に有意な差は見られなかったことから、各専攻ではそれぞれの生徒の特性に合わせた専門教育が行われ、各専攻でキャリア意識の形成がなされていると言える。

また自由記述の質的分析からは、表1のとおり、芸術科生徒のキャリア意識が学年進行に沿って仕事・職業という直接的なところから、社会的な広い視野を持つまでに至っていることが明らかとな

表1 自由記述における特徴表現の学年比較

	1年	2年	3年
1	仕事・職業に就きたい	絵を描く	作品を作る
2	仕事・職業に役立つ	仕事・職業に就きたい	社会に出る
3	自信につながる	人に接する	意見を持つことができる
4	大学への進学	社会に出る	楽しさを伝える
5	役に立つ	仕事・職業に就く	力がつく

った。また芸術科高校生は、将来の厳しさを予想し、資格の必要性や生活と芸術のバランス、道を究めていくためのアドバイスを求めている。本調査により、現在学んでいる専門的な知識を活かして、将来、芸術・音楽・美術関係の仕事に就き、社会で働きたいと考えている芸術科高校生のキャリア意識が明らかとなった。

### (3) 芸術科卒業生のキャリア形成に関する特徴と要因の解明（調査Ⅱ）

芸術科卒業生のキャリア形成の特徴と要因を明らかにすることを目的に、芸術科卒業生へキャリア形成に関する質問紙調査を実施した。調査結果はK J法、M-G T A<sup>7</sup>、テキストマイニングを援用して質的分析を施し、その分析結果から考察を行なった<sup>8</sup>。

芸術科卒業生の調査は、2015年6月下旬に38人に質問紙によって行なった。回答はすべて有効回答であった。調査結果の質的分析と考察から、本調査に回答した芸術科卒業生のキャリア形成の要因として、①本人の専門性の追求に基づく個性の構築と、②他からの影響による本人の役割の拡大を基に、③社会とのかかわりによる自身の変容と、④上記3点の総体的蓄積としての本人の役割の変化、の4点が明らかとなった。さらに、この形成過程では図2のとおり、自身の活動の深まりと社会とのかかわりによる視野の拡大からキャリア形成がなされていることも明らかになった。

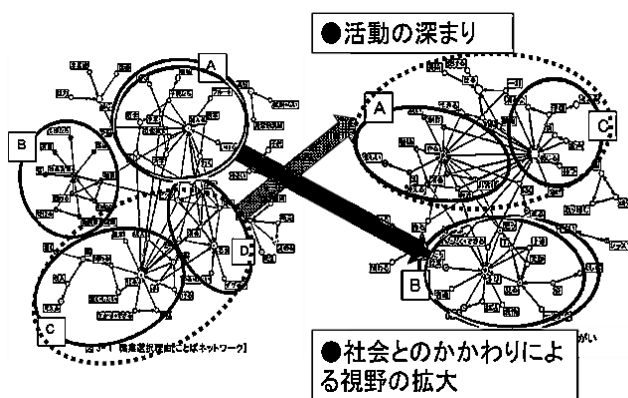


図2 芸術科卒業生キャリア形成の拡大図  
(TMSことばネットワークによる)

### (4) 定時制課程高校生の文化芸術的活動に関する意識の把握（調査Ⅲ）

芸術科における生涯学習社会の進展を支える取り組みを相対化するために、芸術教科の特性を活かした文化芸術的活動の開発と実践と共に、定時制課程高校生への調査を実施した<sup>9</sup>。

調査結果の量的分析と考察から、定時制課程高校生の文化芸術経験の有無が、現在の文化芸術の愛好度に影響していると言える。文化芸術の経験を有するほど、彼らは新たな文化芸術活動を興味深く捉え、芸術に触れる機会を通して自己を見つめるなど、芸術を多様な視点で捉えていることが明らかとなった。このことは、学校段階において文化芸術に触れる活動を重ねることで、自分の知らない新しいことを想像し、自分と文化芸術について幅を広げて考えることに影響を与えることができる。これは、生涯にわたり芸術を愛好する心情の育成に大きく寄与することを示している。

## 4 芸術科におけるキャリア教育プログラムの開発

### (1) 芸術科生徒の特徴—理数科生徒との比較—

山崎(2015)<sup>10</sup>の先行研究では、理数科生徒の将来の職業と社会に対する意識の因子分析から、

「職業理解」、「役割意欲」、「社会的関心」の3つの因子が明らかとなっている。前掲調査Ⅰと調査Ⅱの結果とこの先行研究を比較すれば、理数科生徒の「職業理解」の因子は、芸術科高校生の「職業の理解」の因子と重なり、理数科生徒の「役割意欲」の因子は、芸術科卒業生の「役割の拡大」の要因と重なる。つまり、芸術科の専門教育の充実を図るためには、現在学んでいる専門的な知識を活かして社会で働きたいという芸術科高校生の思いを基に、卒業生調査が示す「役割の拡大」に「社会的関心」を育てる要素となるものを加えた、芸術科におけるキャリア教育プログラムの開発が重要となる。

以上のことから、専門教育を行なう芸術科の振興を図る方策の開発という本研究の目的を達成するために、下記の実践を試みた。まず初めに、高校生が自己実現の意欲を高め、役割の拡大や自分のキャリアに見通しを持つために、「芸術科ライフモデル集」を作成した。次に、生徒の実態やニーズの把握・課題を明確に示し、生徒・教師・卒業生相互の情報交換の機会を創出し、測定可能な目標の設定を促す「キャリア教育活動」の実践を行なった。そして、芸術科高校生の高い意欲に基づく、ブランディング能力、プロデュース能力、マネジメント能力を引き出す実践的な教育活動として、「アートマネジメント講座」を企画し、芸術科高校生が自身の役割を拡大し、社会的関心を高めることができる活動を考えた。

## (2) 芸術科ライフモデル集の作成

三後・金井(2003)<sup>11</sup>は、キャリアモデルとなるような目標としての人物がいることで、自分のキャリアに見通しを持つことができ、見通しを持つことで、自分に適した職業を探索することができると感じ、自己実現的な意欲につながるというプロセスを示している。また、平尾(2005)<sup>12</sup>は、キャリアモデルを探す活動が、自分が共感できる働き方を具体的にイメージするためのキャリア教育の一手法として有効であることを示している。

このような先行研究の知見から前述調査Ⅱを捉えれば、芸術科卒業生に、自分を築く基礎となったもの、現在の生きがいや仕事に対する価値観、芸術科高校生に対するメッセージやアドバイスを尋ねた調査は、芸術科におけるキャリアモデルやロールモデルであるとも言える。このことから、調査協力をあおいだ卒業生の同意のもと、調査で得た回答から「芸術科ライフモデル集」(図3)を作成した。作成にあたっては、レイアウトの工夫を行ない、生徒の手の届くところに置いて、生徒が見たい時にすぐ見ることができる資料とすべく作成した。そして、完成した冊子を静岡県公立高校芸術科と県教育委員会に提供した。

## (3) 芸術科キャリア教育活動の実践と検証

### ① 実践

芸術科キャリア教育活動は、大学教員と検討の上、原案を作成した。その後実施までに、芸術科2年担任と4回にわたる事前打ち合わせを持った。事前打ち合わせでは、担任からクラス生徒の現在の様子やこれまでのキャリア教育への取り組みについて聴取した。その上で、担任と共に、

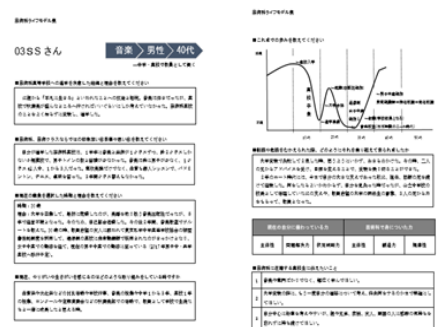


図3 芸術科ライフモデル集

本活動の目的達成のための方法を考えた。

2015年10月6日放課後に、「芸術科ライフモデル集を活用したキャリア教育活動」をS高校の視聴覚室で実施した。芸術科2年生を対象とし、21HR33人全員が参加した。活動は芸術科ライフモデル集を資料として、担任（教科：美術）と筆者（教科：音楽）の対話を中心に進めた。授業の始めに、担任が生徒に本時の活動の主旨を説明し、次いで、筆者が生徒調査と卒業生調査の結果を報告した。その後、生徒は資料内の気になる、または興味を持ったフレーズを付せんに書き出す個人活動(図4)、記入内容の確認、分類、ネーミングを行なうグループ活動に取り組んだ(図5)。その後、生徒は教室内を歩き回りながら情報を共有し、各グループワーク紙に、コメントを記入した(図6)。



図4 個人活動



図5 グループ活動



図6 コメント記入

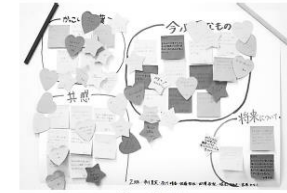


図7 グループワーク紙

## ② 検証

上記実践後、生徒の振り返りシートへの記述内容の分析と、その考察を通して、この活動の検証を試みた。まず、自由記述欄の回答を内容ごと切片化し、それを文部科学省によるキャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」の4つの能力「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応力」、「キャリアプランニング能力」の要素での分類を試みた。結果は表2のとおり、「人間関係形成・社会形成能力」や「自己理解・自己管理能力」の理解に関する記述が多く、「課題対応力」や「キャリアプランニング能力」などの深層のキャリア学習がなされていたことは示されてはいなかった。

次いで、テキストマイニングでの回答の分析を試みたところ、生徒は本活動を今一度、自分のこれからを考える良い機会として位置づけていたことがわかったが、ここでも、具体的活動に対する感想などの表層での捉えを示す表現が多く、深層のキャリア学習の成果は、見る事ができなかった。この結果の理由としては、振り返りシートの設問が深層のキャリア学習を的確に捉えるものではなかったことが考えられる。今後、芸術科キャリア教育活動を実施する際には、「課題対応力」や「キャリアプランニング能力」などの深層のキャリア学習がなされているかを適切な設問によって、生徒に確認することが必要である。

表2 自由記述分類

能力	切片数
人間関係形成・社会形成能力	33
自己理解・自己管理能力	30
課題対応力	6
キャリアプランニング能力	12
その他	20
計	101

## (4) 芸術科高校生アートマネジメント講座の企画

魅力ある地域づくりの仕組みや、文化や芸術を活用した人と文化を繋ぐ活動が必要とされている現在、地域と生涯学習、人と文化芸術をつなぐ人材の育成が重要となる。このことから、大学との連携による、芸術科高校生のためのアートマネジメント講座を企画した。

## 5 まとめ

本研究の目的は、静岡県公立高校芸術科の振興を目指した芸術科の専門教育の充実を図る方策の開発である。この目的を達成するために、芸術科高校の全国および静岡県の動向を明らかにした上で、芸術科の専門性を活かしたキャリア教育プログラムの開発を行なった。ここで開発した芸術科におけるキャリア教育プログラムは、前述のように、①芸術科ライフモデル集、②芸術科キャリア教育活動、③芸術科高校生アートマネジメント講座の3観点を持つ。開発したプログラムは、静岡県公立芸術科における専門教育の一層の充実が期待できるものであり、ひいては高校芸術科の振興の方策として活用できるものである。そして、このプログラムを各芸術科生徒の実態と実施する教師に合わせた形にリデザインし、高校3年間にスパイラル的に行なうことで、効果が高まると考えられる。

筆者は芸術科における専門教育は、芸術を介して自己を見つめ、自分の表現技術を高める過程で表現者としての創造性を磨き、他者からの評価を通して自身を成長させていると考える。芸術科では、生徒に明確な目的を持った学びを提供しており、この時間と場所が、生徒の自己研鑽による価値観の確立につながっている。ゆえにこの環境は、芸術科卒業生の人生において、大きな影響力を持つものと考えられる。生涯学習における知と徳の力の基礎を培う高校での教育活動では、進行しつつある成熟社会に適合した新たな社会モデルの構築が今後重要となる。このことから、現在の文化芸術への高い期待に対して、芸術科の特性を活かした社会とのつながりを意識した専門教育の振興が望まれる。

- 
- <sup>1</sup> 文部科学省「オリンピック・パラリンピックレガシー創出に向けた文部科学省の考えと取組」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/mextlegacy/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/161362237\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/mextlegacy/_icsFiles/afieldfile/2015/11/161362237_01.pdf)(2015年12月2日閲覧)
  - <sup>2</sup> 静岡県公立高校芸術科は、音楽・美術専攻からなる芸術科が2校、音楽・美術・書道専攻からなる芸術科が1校設置されている
  - <sup>3</sup> 平成26年度全国音楽高校協議会『全国大会要項』平成26年(現時点では平成27年度の入手ができなかった)
  - <sup>4</sup> 全国美術高校協議会「平成27年度会員校名簿」  
[http://www.geiso-h.spec.ed.jp/?action=common-download\\_main&upload\\_id=5941](http://www.geiso-h.spec.ed.jp/?action=common-download_main&upload_id=5941) (2015年9月10日閲覧)
  - <sup>5</sup> 全国書道高等学校協議会『平成23年度研究紀要』全国書道高等学校協議会、第17号(現時点では平成27年度の入手ができなかった)
  - <sup>6</sup> テキストマイニングとは、文字情報を対象にしたテキストデータから新たな事実や傾向を発見する分析方法  
今村誠「第1章テキストマイニングとは」上田太郎監修『事例で学ぶテキストマイニング』共立出版、2008年、1頁
  - <sup>7</sup> M-GTA(Modified Grounded Theory Approach)は、グレーザーとストラウスによって1960年代に考案されたグラウンデッド・セオリー・アプローチの検討から、その可能性を実践しやすいように改良された質的研究法  
木下康仁『ライブ講義M-GTA—実践的質的研究法—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂、2007年、7頁
  - <sup>8</sup> 水田忍美「芸術科高等学校卒業生のキャリア形成に関する調査研究—テキストマイニングを活用した質的分析—」  
『2015年度 VMStudio&TMStudio 学生研究奨励賞』2015年  
[http://www.msi.co.jp/tmstudio/stu15contents/No8\\_muc15\\_TMS\\_mizuta.pdf](http://www.msi.co.jp/tmstudio/stu15contents/No8_muc15_TMS_mizuta.pdf) (2016年2月3日閲覧)
  - <sup>9</sup> 水田忍美「高等学校における文化芸術に期待される役割とその実践的方法—S 県立 A 高等学校定時制課程での実践を通して—」『日本高校教育学会年報』第22号、2015年、18-27頁
  - <sup>10</sup> 山崎保寿「高校生の科目選択および進路意識に関する研究—理数科および普通科生徒の比較を中心として—」『教科開発学論集』第3号、2015年
  - <sup>11</sup> 三後美紀・金井篤子「高校生の進路選択過程における自己決定経験とキャリアモデルの役割」、『経営行動科学学会年次大会：発表論文集』第6号、2003年、135-139頁
  - <sup>12</sup> 平尾元彦「キャリア教育の手法としてのキャリアモデル」『大学教育』山口大学大学教育機構、第2号、2005年、95-104頁